トヨテック

先進性と信頼性で採用

シート／ロール兼用の戦略機にも

㈱トヨテック（千葉県野田市西三ヶ尾、豊田保社長、☎04・7121・0755）は、ラベル印刷向けに4カットヘッドを搭載したロールタイプのカッティングプロッタ「DGR4―350」を提供している。

カット刃を4ヘッド搭載した同機は、最大毎分15㍍を誇る高生産性モデル。ラミネート機能を標準搭載したほか、最長900㍉のカット、5スリッター搭載、モーターサーボドライブコントロールにシートカットユニットをオプション選択できるなど機能が満載だ。

「QRコードをスキャンしカットデータのファイルを自動取得するなど、誰でも扱える易操作性を評価いただく。また近年は和紙ラベルのように基材の凹凸にもきれいに印字可能と謳うデジタル印刷機もある。ただ基材の凹凸は、プロッタが苦手とする部分。DGR4―350は綺麗にカットが行え、実際デジタル印刷機メーカーの方からも評価されている」。こう語るのは、部長の豊田啓氏だ。

同氏は「DGR4―350よりも引き合いが多いのが『DG―4060Ⅱ／Plus』」と続ける。

同機はシートタイプの自動給紙カッティングプロッタ。A2相当サイズのシール・ラベルをはじめコートボールなどの紙器以外に、電動振動カット刃で厚さ6㍉までの各種ボードや樹脂版のカットが行える。また同機にロールフィーダーを取り付けることで、ロールメディアのカットも可能。豊田氏は「シートもロールも、またハーフカット以外にフルカットに筋入れと、1台で多様な加工ができると評されている」と話す。

豊田啓部長

柔軟な使い方で引き合いを得る背景にあるのが「ラベル印刷会社が紙器を手がけるため」、あるいはその逆で「紙器印刷会社がラベルをはじめるきっかけとして」選ばれるのだと同氏は指摘。DG―4060Ⅱ／Plusは年間約30台を出荷するとし、業容拡大を狙う印刷会社の戦略機となっていることがうかがえる。

シート型の「DG-4060 Ⅱ /Plus」。ロールフィーダーの搭載が可能で、ラベル印刷会社や紙器印刷会社が業容拡大で選ぶことも

加工の自動化に専心

DG―4060Ⅱ／Plusは、5年前に登場した2世代目。「自動給紙機構のついたシート型プロッタという当時存在しなかった画期的な初号機だったが、発売5年間で実績は10台にも満たなかった」と豊田氏は苦笑する。ロールフィーダーを備え、フィード方式を変更し、より薄物から厚物までカット可能になり「Ⅱ」の評価はこれまでのものから一変することに。

進化が評価され市場に受け入れられたことで、多くの類似製品が現れた。導入を考える企業が価格や性能、保守などの判断基準から精査した場面で「最後は機械の安定性が他社の追従を許さない」と同氏はトヨテックの強さを強調。購入後1年間は無償保証付き、販売後は100%面倒を見るとの姿勢が支持を得る。

これまでプロッタに人が張り付き手差しをしていた時代に、自動給紙機能で無人化をいち早く実現した同社。「1人が何役も担えるようになったと感謝されるのがうれしい」と、豊田氏の表情に笑顔がのぞく。

デジタル印刷機はスキルレスと省人化を果たす一方、加工は今だ人手と職人芸に依存する。「強調したいのは、デジタル加工にはデジタルのよさがあるという点。小回りが利き、アナログ機が苦手な部分を補完する。1台あれば既存のアナログ機による加工からデジタルシフトを果たし『せっかくなら新しいものづくりにも挑戦してみよう』と意欲も生まれ、景色を変えてくれる」。豊田氏は言葉に力を込めた。